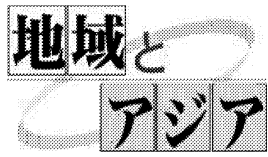


インドネシアで発電

アブラヤシ残渣を利用

再生エネ事業のアウラ

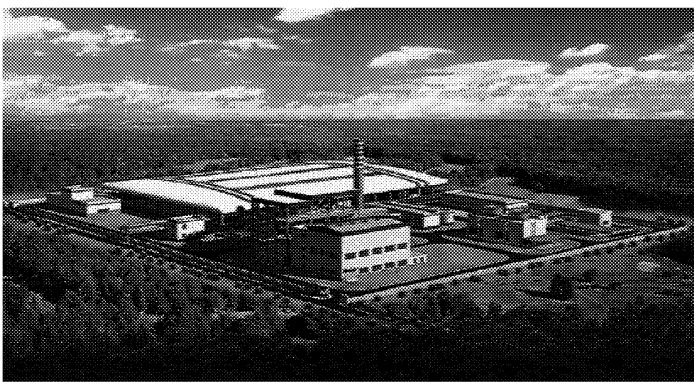
再生エネルギー事業を展開するアウラグリーンエナジー（青森市）はインドネシアでバイオマス発電に乗り出す。現地企業と合弁でスマトラ島アチェ州に約30億円かけて発電所を建設し、2021年度に事業を開始する予定。主燃料にパーム油を搾った後のアブラヤシ残渣（さんざ）を利用。廃棄物削減に貢献するとともに、電力の安定供給を目指す。



インドネシアの政府系パーム油製造会社などが設立した発電事業会社に

30%（7000万円）出資。発電出力1万2000キロワットの発電所を4月に着工する。発電事業会社の年間売上高は約7億円の見込み。油を搾った後のアブラヤシ残渣は水分を多く含む腐敗しやすく、燃焼時に焼却施設を腐食させる成分を出すため、従来ほとんど廃棄されていた。インドネシアはパーム油生産量世界1位で、「膨

大な残渣処理に困っていた」（アウラの川越幸夫社長）という。アウラのインドネシアでの発電事業は、廃棄される焼却施設を腐食せしめ、高耐食性のステンレスを使うことなどで解決した。発電事業は環境省の「二国間クレジット制度・資金支援事業」に採択され、9億円補助金を受けた。インドネシアは人口増などを背景に電力が不足していることが多く、電力供給に貢献し「気味で電力の安定供給が課題となっている。アウラは2015年の設立。青森県や北海道などが軌道に乗り次ぎ、同国でも風力発電、バイオマス発電、太陽光発電事業など手がけており、2018年の売上高は5億3700万円。



発電所の完成予想図（写真上）。パーム油を搾ったあとのアブラヤシ残渣（写真下）